

《研究ノート》

一五〇年前の畑を探る

「おばあちゃんの畑」プロジェクトの成果―

島立 理子

木曾野 正勝

I はじめに

平成二〇年度、千葉県立中央博物館では、文化庁から「平成二〇年度芸術拠点事業 ミュージアムタウン構想」の委託を受け、「房総の山のフィールド・ミュージアム」が事務局となって、「おばあちゃんの畑」プロジェクトを実施した。

このプロジェクトは、地域の文化が詰まっている「畑」を「おばあちゃんの畑」と名付け、房総丘陵で活動する諸団体が連携して、「おばあちゃんの畑」について調べ、発信することを通して、新たな地域文化を創造することを目指した活動である。

「房総の山のフィールド・ミュージアム」の活動地域である房総丘陵で作物のタネをとり続け、畑を守ってきたのは、おばあちゃんたちである。また、彼女たちは、畑についての豊富な知識を持っていることから、プロジェクト名を「おばあちゃんの畑」プロジェクトとした。

一五〇年前の畑を探る ―「おばあちゃんの畑」プロジェクトの成果―(島立・木曾野)

この活動の一つに、古文書の中に登場する「一五〇年前の畑」について探る活動がある。これは、「清和の古文書を読む会」と千葉県立中央博物館「房総の山のフィールド・ミュージアム」が中心となっておこない、古文書の解読にあたっては、千葉経済大学菅根幸裕氏にご指導いただきながらすすめている。

本報告は、この「一五〇年前の畑」を探る活動の成果をまとめたものである。

① 「日記」は情報の宝庫

「日記」の分析は、生活史の分野にとって、とても有効な手段であり、実際に日記を使った生活史へのアプローチは数多くある。⁽¹⁾しかし、日記に記された地名、字名、人名、社寺などの名称、方言と思われる語句などが多く含まれ、その読解は難しく、内容の理解は更にむずかしい。

しかし、実際に解読作業をすすめていくなかで、博物館の職員など地域外の人間が、地名や寺社名、方言などを読み下すのに大変な労力が必要なのに対し、地元の方々にとってはそれほど労力を必要としないことがわかった。また、農作業に関する語句や行事などについては、地域のお年寄りに話しを聞くことでその多くが解決する事もわかった。

本報告は、地元の古文書同好会「清和の古文書を読む会」や地域の

人々、博物館の職員との協働の成果である。

② 「清和の古文書を読む会」と「星野家日記」について

今回分析の対象とした日記は、君津市市宿地区に伝わるものである。

市宿地区は、房総丘陵、君津市と鴨川市の境を源流とし、東京湾に注ぐ小糸川の中流に位置し、名刹神野寺のある鹿野山への登り口の一つであり、また、地名の「宿」という文字からもわかるように、宿場町であった。また、江戸から明治のはじめにかけては、小糸川水運の河岸もあり、物資の集積地でもあった。

平成一八年八月に「市宿に元気を」の合言葉のもとに、市宿区が「宿場回想展」を行った。この回想展では、かつて市宿区が行政経済においてこの地の中心地であった頃の面影を知ることが出来るさまざまな資料を区民から募り展示し、区民みんなが共通した歴史認識を得ることにより、市宿区民に誇りと元気を取り戻そうとの趣旨で行われたものである。

これをきっかけに星野家現当主の遠藤好美さんから、蔵に保存されていた、多数の古文書（「星野家文書」）が開示された。星野家は代々市宿村の名主を勤めており、旗本曾根氏の領知二十か村の大惣代でもあった。

「星野家文書」は表1、享保三年（一七一八）から明治五年（一八七二）までの一五四年間にわたる九〇点の文書からなり、内容別に分類すると、生活を綴った「日記」が三七点、「廻状・2写」や「組合高家

数人数書上帳」など村政に関するものが三六点、その他生活に関するものが一七点であった。特に、日記類は点数も多く、当時のこの地の生活を知る上でとても貴重な資料である。

しかし、「星野家文書」は長い年月を経過する中で、雨水などの浸入があり、簡単には開くことが出来ないものが多数含まれており、読のためには、古文書を開く作業を行わなければならない。このような水を受けた古文書（材質は和紙に限る）は、竹べらなどで一枚ずつはがし、古文書修復用の糊で簡単な裏打ちによる修復作業を行うことで、ページを開ける事ができるようになる。

「星野家文書」についても、この作業をおこなっている。この修復作業は現在、二名のボランティアの方によって行われている。当初は「平成二〇年度芸術拠点事業 ミュージアムタウン構想」の事業経費からアルバイトとしてお願いしたが、当初予定の日数終了後はボランティアとしてお手伝いいただけるとの有難いお申し出により継続して行っている。

「清和の古文書を読む会」は、精神的な生きがいづくりを目指して、清和地区の有志四名が集まり、平成一八年十一月十六日に発足した会で、現在会員は九名である。君津市清和公民館を会場に月一回例会をおこなっており、現在は、市宿の「星野家文書」のうち、日常生活がつづられている日記を中心に解説を進めている。

表1 君津市市宿「星野家文書」目録

| | 文 書 名 | 年 | 西暦 | | 文 書 名 | 年 | 西暦 |
|----|-------------------------------|------|------|----|--------------------|--------|------|
| 1 | 日記 | 享保3 | 1718 | 46 | 相渡申質地証文之事 | 天明8 | 1788 |
| 2 | 田畑売買惣而判形控覚 | 享保9 | 1724 | 47 | 盗賊并狼籍者一件二付郡中一統相談定書 | 天明8 | 1788 |
| 3 | 触 | 享保9 | 1724 | 48 | 日記 | 寛政2 | 1790 |
| 4 | 証文控 譲田畑判形控帳 | 享保17 | 1732 | 49 | 鉄砲一件被仰渡惣百姓御請連印帳 | 寛政4 | 1792 |
| 5 | 日記 | 元文2 | 1737 | 50 | 上総国地理御札として | 寛政5 | 1793 |
| 6 | 譲り渡し申田地証文之事 | 元文2 | 1737 | 51 | 御廻浦止宿控 | 寛政5 | 1793 |
| 7 | 譲り渡し申田地証文之事 | 元文2 | 1737 | 52 | 丑年日記 | 寛政5 | 1793 |
| 8 | 加判控覚帳 | 元文5頃 | 1740 | 53 | 寅年之日記 | 寛政6 | 1794 |
| 9 | 尋者二付村々御印形申請候帳 | 元文5 | 1740 | 54 | 丹掘荒山一件願書控 | 寛政11 | 1799 |
| 10 | 御廻状之写・星野彈藏 | 延享2 | 1745 | 55 | 村定書 | 文化1 | 1804 |
| 11 | 乍恐以書付御願申上候 (川船) | 延享4 | 1747 | 56 | 心覚日記 | 文化2 | 1805 |
| 12 | 相定申小作証文之事 | 寛延1 | 1748 | 57 | 頼母子講連名帳 | 文化7 | 1810 |
| 13 | 日記 | 宝暦2 | 1752 | 58 | 御廻状之写・星野弾右衛門 | 文化9 | 1812 |
| 14 | 市宿村奉公人書上帳 | 宝暦5 | 1755 | 59 | 乍恐以書付奉願上候 | 文化11 | 1814 |
| 15 | 日記 | 宝暦6 | 1756 | 60 | 御廻状之写・星野弾右衛門 | 文化14 | 1817 |
| 16 | 丁丑日記・星野氏 | 宝暦7 | 1757 | 61 | 御水帳田畑屋敷石割覚 | 文化14 | 1817 |
| 17 | 日記 | 宝暦9 | 1759 | 62 | 日記 | 文政2 | 1819 |
| 18 | 日記・星野彈藏 | 宝暦10 | 1760 | 63 | 日記 | 文政2 | 1819 |
| 19 | 日記・星野彈藏 | 宝暦12 | 1762 | 64 | 酉年日光山御参詣御用取調 | 文政7 | 1824 |
| 20 | 日記・星野彈藏 | 宝暦13 | 1763 | 65 | 周准郡邑高控 | 文政10 | 1827 |
| 21 | 日記・星野彈藏 | 宝暦14 | 1764 | 66 | 上 御請書 | 天保4 | 1833 |
| 22 | 乙酉年日記・星野氏 | 明和2 | 1765 | 67 | 諸状控・星野氏 | 天保6 | 1835 |
| 23 | 油屋相談役 | 明和4 | 1767 | 68 | 日記 | 天保7 | 1836 |
| 24 | 日記 | 明和4 | 1767 | 69 | 御寄進連名帳 | 天保12 | 1841 |
| 25 | 御運上五ヶ年御請負惣目録 | 明和4 | 1767 | 70 | 御取締筋被仰渡御請証文 | 天保12 | 1841 |
| 26 | 日記 | 明和5 | 1768 | 71 | 御取調二付油絞り稼書上帳 | 天保14 | 1843 |
| 27 | 日記・星野彈藏 | 明和6 | 1769 | 72 | 日記 | 安政5 | 1858 |
| 28 | 日記 | 明和7 | 1770 | 73 | 当年醬油造人名前造高書上帳 | 安政5 | 1858 |
| 29 | 辛卯年日記・星野彈藏 | 明和8 | 1771 | 74 | 日記 | 安政6 | 1859 |
| 30 | 御廻状之写 | 明和8 | 1771 | 75 | 大小総代寄場役人御案内人名前帳 | 万延1 | 1860 |
| 31 | 日記・星野彈藏 | 明和9 | 1772 | 76 | 日記 | 万延2 | 1861 |
| 32 | 御廻状之写・星野彈藏 | 安永2 | 1773 | 77 | 日記 | 文久2 | 1862 |
| 33 | 日記 | 安永2 | 1773 | 78 | 組合高家数人数書上帳 | 慶応2 | 1866 |
| 34 | 上総国周准郡市宿村外式拾ヶ村 組合御宿仕候儀二付書付 | 安永2 | 1773 | 79 | 人員増減取調書上帳 | 明治4 | 1871 |
| 35 | 日記・星野彈藏 | 安永3 | 1774 | 80 | 行衛不知者書上之写 | 明治5 | 1872 |
| 36 | 日記 | 安永4 | 1775 | 81 | 村高帳 | 不明 | |
| 37 | 酉年日記・星野彈藏 | 安永6 | 1777 | 82 | 急 廻状 | 不明 | |
| 38 | 日記 | 安永8 | 1779 | 83 | 惣勘定目録 | 寅二月廿七日 | |
| 39 | 拵御改御役人御泊り会所入用帳 | 天明1 | 1781 | 84 | 亮渡証文控 | 宝暦・寛延頃 | |
| 40 | 先触廻一件写 | 天明1 | 1781 | 85 | 星野左右門・前田孫四郎田畑 | 年代不明 | |
| 41 | 日記 | 天明3 | 1783 | 86 | 田畑反別取調帳 | 年代不明 | |
| 42 | 日記 | 天明5 | 1785 | 87 | 人足 | 年代不明 | |
| 43 | 日記 | 天明6 | 1786 | 88 | 家作書上帳 | 年代不明 | |
| 44 | 運上拾ヶ年目録 | 天明6 | 1786 | 89 | 米雜穀右高一村限り言上帳 | 年代不明 | |
| 45 | 日記 | 天明7 | 1787 | 90 | 加籍 | 年代不明 | |

Ⅱ 安政五年の日記の概要

① 「日記」について

このプロジェクトでは、「星野家文書」のうち「安政五年 日記」を対象として当時の畑の様子を探る事とした。この日記を取り上げ理由は、正月から一二月まで一年間を通した記事が残っている事と、状態の悪いものが多い「星野家文書」中、比較的状态がよいことによる。

「星野家日記」は、星野家の当主によって書き継がれてきたものであり、その内容は天気にはじまり、村政にかかわること、山仕事、田畑の仕事、寄合の事、家政に関わることなど多岐にわたっている。今取り上げる農作業については、誰がどういう作業をしたか、人名だけでなく日雇い、助人の別なども併せて記されている。

しかし、すべての農作業が記されているわけではない。手間のかかった作業、特別な作業については記されているが、日常的な作業は記載されていない場合が多い。たとえば、四月五日に「茄子、ほふき、胡瓜」の苗を寺からもらい植え付けた事は記されているが、これらの収穫についての記載はない。茄子、胡瓜は熟した実から順次収穫し食卓にあがったため、特に記録すべき作業として認識されていなかったのだろう。

それに対し、十月二十日には「人参、牛蒡」を掘った記載はあるが、種を蒔いた時の記載はない。人参、牛蒡の収穫は一斉に行い、しかも、牛蒡は土中に長く伸び、それを掘らなくてはならなかったため、かな

りの労働量であった。実際にこの日の作業は一日ではおわらず、翌日まで持ち越している。

また、当時は旧暦(太陰太陽暦)が使われていたので、現在の太陽暦との間に一ヶ月程度の遅れが生じる。現在と比較する場合には、その点での注意が必要である。

日記を史料として使う場合には、こういった日記の性格を考慮して使わなくてはならない。

② 農作業の担い手

農作業に関する記述は二月半ばの「種井戸払い」にはじまる。これ以降、作業の主な担い手は源七、友吉、さいの三名である。友吉、さいの二名は奉公人であるが、源七について細かい事はわからない。しかし、源七の妻と考えられる「源七内」が日雇いとして草取りなどに来ており、星野家の人間ではない。なお、日記中に登場する「○○内」とは、○○の妻と考えられる。

奉公人は、毎年二月二日に奉公先を入れ替わる。これを、出替わり(でがわり)と呼んだ。安政五年二月二日の日記には次のようにある。

手前奉公人おほの定夫林蔵も今日目出度奉公相勤宿へ引申候、友

吉義は重年に御座候、今日夕方宿へ引申候

おきい義は当年手前方へ奉公に相頼今日引越申候、

前年の奉公人中、友吉のみが「重年」（チュウネン）でもう一年奉公する事となったが、この日は一旦宿（実家か？）に帰っている。翌二月三日には、きいという女性が奉公人として引越してきており、この年の星野家の奉公人は、友吉ときいの二名となった。

源七、奉公人の他に「日雇い」で多くの人々が農作業を行っていた。

五月二日には「三四郎日雇芋うない、友吉、きいはだか麦収納」とある。友吉きいの二名の奉公人とは別に、日雇いで三四郎が「芋うない」の作業をおこなっている。また、六月二九日には、「関谷粟草取日雇、源七内、半之助内、おせん、おきく、文右衛門内メ五人にて取中候」とあるように、五人の日雇いが来て一斉に除草作業をおこなっている。田畑の除草、稲刈り、葉たばこのしなどは特に人手が必要なお作業であつたらしく、多くの日雇いが作業をおこなっている。

八月五日には「揚葉のし、おつね、およし、おやゑ、源七内、おとりメ五人外にきい友吉は休に御座候」とある。八月五日は、「風坪」で日待ちのため奉公人は休みで、日雇いのみが仕事をしている。日待ちによる仕事休みは、奉公人だけだつたようだ。

「風坪」はカザツボとよみ、節分から数えて二百十日、二百二十日におこなわれる風よけの行事である。台風などで大風が続くことが多く大風が吹かない事を祈つておこなれた。「風祭（カザマツリ）」「風よけ」と呼んでいる地域が多い。安政五年は、七月二四日が二百十日、八月五日が二百二十日だつた。

八月二〇日は「たばこのし、日雇、源七女房、およし、おつねメ三人大豆畑うない友吉源七きい」とあり、前出の五月二二日同様に、日雇いと奉公人が別の仕事をしている。日雇いと奉公人は性格の違ふものであつたことがわかる。

五月一六日は川崎の田んぼの太田植えだつた。「草乙女、半兵衛内、安次郎内、久兵衛内、源七内、作右衛門内、助次郎内、林蔵内、長右衛門母、利左衛門内、皆々助人御座候」とあり、早乙女として九人の女性が田植えをしているが、「皆々助人」であるとするされている。

一方、五月一九日の記事には「友吉は定吉方へ助に参り候」とある。定吉家の田の作業（おそらく田植え）には、奉公人を助人に行かせている。人手が必要な田植えの際の共同作業であつたのだろう。日雇いと助人もまた、性格の違ふものだつたようだ。

③ 日記の中のまつり

日記には「日待ち」「まち」など多くの祭り、休日についての記述があるが、その中には現在でもおこなわれているものもある。三月二一日。

中嶋成願寺まちへ、音之助、友吉供にて参詣致候

「中嶋成願寺まち」は、君津市中島（小糸地区）にある真言宗成願寺の御影供の事と考えられる。現在では四月二六日におこなわれてお

り、地元では「メイコ」「メイコウ」と呼ばれている。当日は門前に市が立ち並び、特に苗物を売る市として有名である。また、小糸地区では昭和三〇年代までは、この日の午前中に稲の種まきをし、午後「メイコ」に出かけたという。三月二十八日には次のようにある。

天気、鹿野山まち大当りに御座候、人立もよろしく誠におだやかに御座候、

これは現行の白鳥神社の例大祭の事と考えられる。現在は四月二八日におこなわれている。市宿地区での聞き取り調査では、中島成願寺の御影供同様に、昭和三〇年代まではこの日の午前中に稲の種まきをし、午後鹿野山の祭りへ行ったという。

ちなみに、安政五年の星野家の種まきは三月一六日で、成願寺のまちと、鹿野山まちの間である。

六月一二日は三直の天王まちに出かけている。

三直天王まち、野村、音之助、常二郎、金二郎、文四郎同道にて

参詣致候

これは君津市三直にある八雲神社の祭礼と考えられる。現在では七月の最終日曜日に行われている。「明治・大正期には神輿・神馬奉納・

馬出しなどが行われ小糸の作では大勢の人出でにぎわった」⁽²⁾ そうである。

七月二六日から二八日の日記には清和市場の諏訪神社の祭礼について記されている。市宿地区は同社の氏子である。

七月二六日

例年の揃夜宮相仕舞候得ば雨大降に相成風も次第に強く吹候得共平和に御座候。

七月二七日

大雨降辰巳風吹祭礼相延申候夜に入次第強く吹候得共平和に御座候。

七月二八日

天気、諏訪祭礼何事もなく日出度祭りも相渡申候、

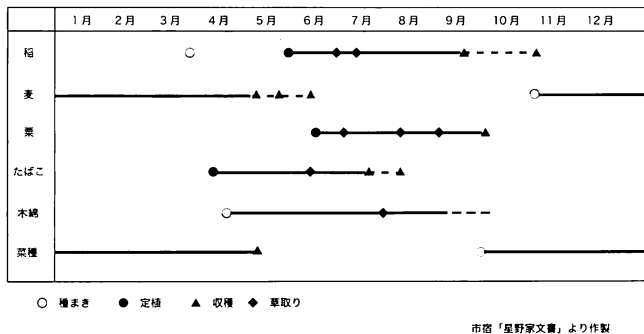
現在諏訪神社の例大祭は八月末の日曜日に行われている。昭和三〇年代まで市宿地区では、諏訪神社の例大祭の時に神楽の奉納をおこなっていた。

二六日の「夜宮」はヨイミヤ、ヨミヤで、祭礼のおこなわれる前日の夜の行事である。神楽を奉納していた当時は、ヨミヤは賑やかに行われていた。日記の書かれた安政五年は祭礼当日に大雨、大風で延期となり、翌日におこなわれている。

表2 安政五年「星野家日記」に登場する農作物

| 穀類 | 豆類 | 野菜類 | その他 |
|------|----------|-----------|-----------|
| 稲(梗) | 大豆 | 芋(里芋) | 木綿 |
| 稲(糯) | 大豆豆(ささげ) | 茄子 | 菜種 |
| 大麦 | 空豆(そらまめ) | 人参 | 茶 |
| 小麦 | | 胡瓜 | ほふき(ほうき草) |
| はだか麦 | | 大根 | たばこ |
| 粟(梗) | | 新菊(しゅんぎく) | |
| 粟(糯) | | 長株(ながかぶ) | |
| 蕎麦 | | 牛蒡 | |
| もろこし | | かき菜 | |

表3 安政5年の栽培暦



中島成願寺の御影供、鹿野山白鳥神社の祭礼、三直の八雲神社の祭礼、清和市場諏訪神社の祭礼の四つの祭りについてみたが、いずれも現在は一月遅れで実施している。明治五年の改暦以前の旧暦の、農業の作業と結びついた季節感で実施していることがわかる。

③ 栽培暦

安政五年の日記にでてくる栽培植物をまとめると、表2のようになる。穀類九種類、豆類三種類、野菜九種類、その他木綿やたばこなど

五種類の計二六種類である。なお、芋については、「里芋」「芋」の二種類の記述があり、「芋」の方はサツマイモをさしている可能性もあるが、「芋」で一種類として数えた。

日記には、ある程度手間のかかる作業のみ記載しており、畑の片隅でみそ汁の実に使う野菜を栽培しているような、小さな畑での作業については載っていないと考えられるので、実際にはもっと多くの作物を栽培していたのだろう。

これらの作物のうち、稲、麦、粟、タバコ、木綿、菜種について、栽培暦をまとめたのが表3である。春から秋にかけて稲、粟、タバコ、木綿の栽培、秋から春にかけて麦、菜種を栽培している。そのため、四月下旬から五月にかけて田植えと麦刈り、九月下旬から十月にかけて稲刈りと麦蒔きで、農作業が集中している。詳しくは後述するが、大麦と稲の二毛作がおこなわれており、それにより、一層厳しいスケジュールとなつている。

① 肥料様々

日記には、田畑にどのような肥やしを使っていたか記されている。

【三月】

- 一五日 苗代こい合致置申候
- 廿四日 たばこ苗四千本買申候、大畑へ植付餘り天気続故うすこいに致沢山かけ申候
- 廿九日 友吉きい馬屋こい出し

【四月】

三日 曇雨も不降、今日かり敷初、九ツ時天氣に相成候

十一日 たばこへだらかけ候

十七日 天氣、友吉きい作りごい致

廿六日 たばこへ元ごい源七友吉きい

【五月】

十一日 源七友吉川崎畔ぬりきいたばこへこやしかけ

【十一月】

三日 昼より菜へこやしかけ

【十二月】

十日 久七友吉川崎田麦へはいこい出候

「こい」「うすこい」「馬屋こい」「かり敷」「だら」「作りごい」「元ごい」「こやし」「はいこい」これらは肥料をさしている。「こい」「こやし」は「肥やし」の意味、「こい」は「肥え」のなまった言葉で、「肥やし」の意味である。

四月十一日「たばこへだらかけ候」の「だら」になると読解するのは難しい。近世史の研究者といえども知っている人は少ないであろう。こういった疑問は地元のお年寄りに聞くことで、即座に解決するばかりか、それにまつわる新たな情報まで入手することができる。

「だら」とは下肥、人の糞尿の事である。君津市豊英のお年寄りに

教えていただいた、下肥の利用法は次の通りである。肥料として下肥を使うためには、最初から糞と尿は別けて貯蔵しなければならなかった。つまり、小便器と大便器はそれぞれ別の瓶を使っていた。溜めおかれていた糞尿はまめにくみ、柄杓を使ってそのまま畑にまいたという。ミダラとも呼んだ。

「馬屋こい」は「馬屋の肥」で、馬小屋の床に敷いた糞は、数日すれば馬の排泄物と糞は混ざり肥料となる。ウマヤギ、ウマヤゲとも呼んだ。

「作りごい」は「作った肥料」つまり、堆肥の事である。落ち葉や草などを積んで牛糞(ウマヤギ)などを混ぜ合わせて熟成させた肥料である。ツールゲ、ツルゲとも呼んだ。

「はいこい」は「灰こい」で灰の肥やしで、山の下草刈りをして燃やした草木の灰などを使った。³⁾

「刈り敷き」は田植え前に行う、田への施肥の一つである。刈草の事をカツチといい、四五月頃のやわらかい草を刈り、牛の敷き藁の代わりを使い、それを堆肥として田んぼに入れた。⁴⁾ あるいは、堆肥にせず、刈ったばかり青い草を田んぼに入れることもあった。

日記中で、単に「こやし」「こえ」と記述されているものが具体的にどのような肥料をさしているかはわからない。使われている場面によって、別のものをさしている可能性もある。

② 田畑の有効利用

五月九日「昼より川崎大田麦束り引取切に相成申候」、一〇月三日「大畑新兵衛畑植場田麦迄蒔仕舞」など、「田麦」という言葉が出てくる。

「田麦」とは、「稲刈りの終わった田で麦を育てる事」だとお年寄りから教えていただいた。稲の裏作に育てる麦は大麦であった。大麦は小麦に比べ収穫時期が早く、大麦を刈った後でも田植えが可能だからだそうだ。

秋の稲刈りから麦まきの間には、刈り取った稲の株を拾って田から出す作業をおこなわなければならず大変であったという。お年寄りから教えていただいた、田麦の時の土地の利用方法は図1の通りである。田の内側に短冊状の土を盛り上げた小高い部分をいくつかつくり、そこに麦をまいていく。田んぼなので、水はけを良くするための工夫がある。

日記から「田麦」の様子を探ってみよう。日記中に出てくる「川崎」は字名、「植場」「居下」「大畑」などは特定の場所をさしている。この中で「川崎」では明らかに田麦をおこなっており、川崎の田麦の様子をおいけてみたい。まずは、五月の麦の収穫から田植えまでの期間である。

【五月】

七日 雨降り、友吉、きい、源七、川崎麦蒔

九日 天気、友吉源七きい昼より川崎大田麦束り引取切に相成申候、夜雨降

十日 雨降り。川崎大田うない源七友吉きい梅二郎鼻取にて溝場拵申候、四ツ時より雨止候

十一日 曇候得共雨は不降、源七友吉川崎畔ぬり

十三日 朝は曇候得共五ツ時より晴天に相成南風強吹申候、源七友吉川崎田拵助人孫八殿男吉右衛門殿男被参候、

十四日 晴天南風吹、川崎作ごい出し友吉源七野村男稲葉や男きい苗取

十五日 朝より曇候得共誠に風も無之至てむし候、源七友吉川崎田拵、昼過より天氣に相成申候八ツ時より又曇七ツ時より雨降り出次第に大降に相成夜に入強降り候

十六日 朝より雨降り四ツ時より雨止、川崎大田植草乙女半兵衛内安次郎内久兵衛内源七内作右衛門内助次郎内林蔵内長右衛門母利左衛門内皆々助人御座候

五月七日に友吉、きい、源七の三名で川崎の麦刈りをおこない、九日午後から刈った麦を束ね（束ねることを地元ではマルウという）、川崎から引き上げた。これで、川崎の田には麦がなくなったわけであ

る。そこで、翌十日に川崎大田をうない(耕し)、十一日に畔ぬり(くろぬり)、十三日に「田拵え」、十四日に「作りごい出し」堆肥を田んぼに入れ、十五日「田拵え」そして、十六日には田植えをしてい。麦を刈ってから田植えまで、わずか十日ほどの間の事である。

十月の稲刈りから麦蒔きまでの間は次のようになっている。

【十月】

朔日 天気、川崎稲苅庄太郎源七女房友吉久七メ四人、夜九ツ時より日和悪く相成候

五日 天気、川崎稲束り、四ツ時より曇り、友吉庄太郎久七おいよ源七女房此式人は昼過より参り苅候分束り、夜に入候ても降りも不致候

六日 天気、川崎稲苅庄太郎おいよ久七源七内友吉は昼前にて朝は曇四ツ半頃より天氣に相成誠に静に候、昼より庄太郎源七女房久七川崎稲束り切稲村致川崎へ置申候

八日 天気、友吉朝より川崎稲引取
九日 天気、川崎稲引取友吉昼前にて仕舞、昼より友吉久七川崎田うない初

十一日 天気、友吉久七川崎田うない源七溝揚げ出来に相成申候
十四日 夜明迄雨少々降候得共雨止曇り五ツ頃より天氣に相成南風強吹候、川崎麦蒔定吉庄太郎友吉久七源七およし源七

女房梅次郎大き処荒方蒔付仕事も皆々出性致し候

十五日 天気、川崎残分麦蒔庄太郎源七女房久七友吉

十月一日から七日にかけて川崎の稲刈りと稲を束ねる作業を行い、八日、九日にかけて刈り取った稲を田から出し、九日の午後には川崎の田を耕しはじめ、十四、十五日に麦蒔きを終えている。この間二週間である。

現在市宿地区では、新暦の四月末から五月はじめにかけて田植えが行われ、八月末から九月はじめにかけて稲刈りが行われる。田んぼはその後、翌年の田植えまで何も植えられない状態が続く。つまり、半年以上は田に何も植わっていない。しかし、田麦を行っていた当時は、田に何も植わっていない時期は殆どなく、田を有効に活用していた。

八月二十五日に「きい田の畔へ空豆植致申候」とある。クロマメとあって、田の畔に大豆や小豆、大角豆を蒔くことは広くおこなわれており、現在でも見ることができる。日記には大豆の栽培についての記載が何方所がある。四月二十五日に樋場畑に大豆を植え、八月九日から数日にわたって収穫、調整作業をしている。「樋場畑」とあり、途中で大豆の草取りもしているので、これらは田の畔に植えた大豆の事ではないと思うが、その他に田の畔で大豆が育てられていたとしても、八月二十五日に田の畔に空豆をまくことは可能であろう。畔でも二毛

図1 「田麦」の際の田んぼの利用法

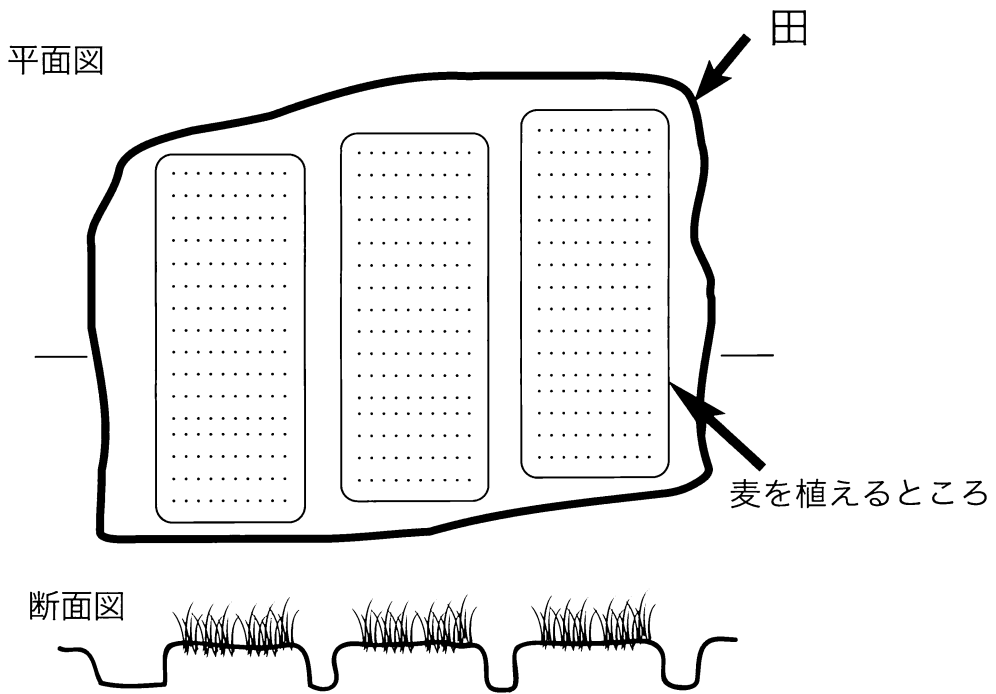
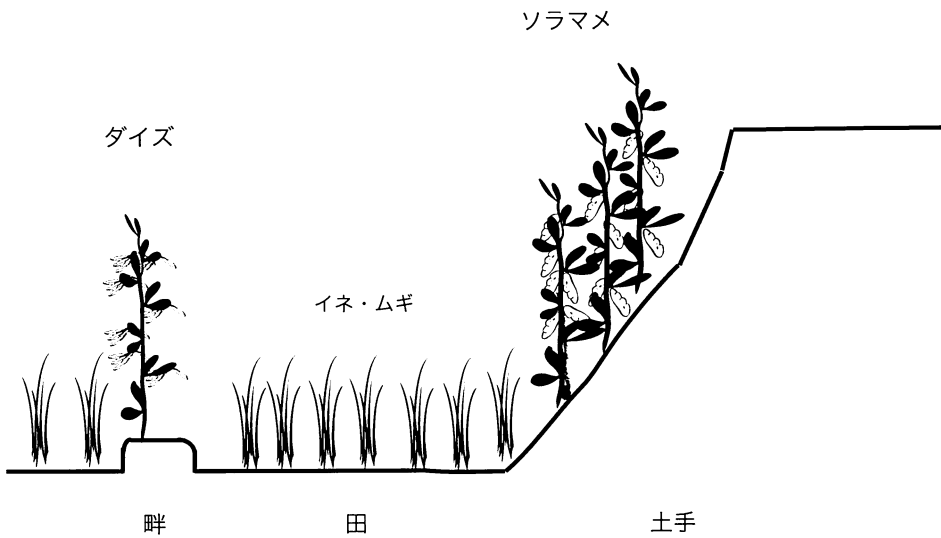


図2 田んぼ周辺の土地利用



作がおこなわれていた可能性がある。

田麦は土地の有効的な活用方法であるが、土地の有効活用からんでお年寄りから興味深い話しを聞いた。畑に作物の種を蒔く時の話しである。一つの畝の中にある種を蒔いているとき、その途中に所々「ぼちゃん」と違う種を数粒落とすのだそうだ。

たとえば、ラッカセイをまいている時に、途中にゴマの種を落とす。ラッカセイは、畑の空間としては下の方で生長し、ゴマは上の方で生長する。つまり、垂直方向の空間を有効に活用していたのである。ニンジンやウリなども「ぼちゃん」落としたが、こちらは下の空間で育つ作物であるので、上の空間を使って育つ作物とペアになったのだろう。十月八日の「木綿畑人参」というのが、それであろう。木綿は上の方に育ち、人参は下の方で育つ。

現在、田の畔にソラマメを植えた話しを聞くことはできないが、ソラマメは田の土手に植えると良い実がなるといふ。このソラマメの事をドテッコと呼ぶそうである。お年寄りに教えていただいた、田んぼ周辺の土地利用は図2のようになる。

「田麦」のような言葉が、他にも出てくる。「たばこ畑麦」「木綿畑はだか麦」がそれである。

四月二十五日「たばこ畑麦引申候」、二十九日に「友吉きいたばこ畑麦かり」のように「たばこ畑」という言葉がでてくる。「田麦」の場合は、田に植える麦の事で、稲と麦の二毛作であったが、タバコと

麦の二毛作は難しい。タバコは三月の下旬に植えつけられており、麦とタバコが同時に畑に栽培されていた。「清和の古文書を読む会」のメンバーによれば、かつて、麦の間にタバコを植えて、風で小さなタバコの苗が倒伏するのを防いだとの事で、日記の「たばこ畑麦」も麦の間にタバコを植えた事をさしていると考えられる。麦刈りが行われる季節になれば、タバコも育ち倒伏することもなくなる。

日記に記載はないが、ゴマを蒔く時に、風除けのため陸稲(オカボ)に添え蒔きしたという話しをお年寄りから教えていただいた。

日記に五月一日「友吉きい木綿畑はだか麦蒔」とある。木綿の種は四月五日に大畑に蒔いているので、木綿の畑に植わったはだか麦を刈ったという事になり、木綿の倒伏防止のために、大きく育ったはだか麦の間に木綿を蒔いたと考えられる。

二毛作、畔や土手の利用、一つの畝に数種類の作物を植え垂直方向の有効利用など、様々な工夫をして土地を有効に利用していたことがわかる。田んぼや畑の周辺の景観は現在とは随分違っていただろう。

③ 村の特産品

周南地区泉のザル、貞元地区中富の飴など、君津市内には地域をあけて、一つの特産品を生産している地区がある。

日記の八月二十四日「友吉馬登村へ蒔五拾枚買に参申候、先方にて此節蒔切に相成廿枚買請帰申候」とある。秋の収穫を前に、豆や麦な

どの収穫物を干すために使う筵を、周南地区の馬登村に買いに行っている。枚数も五〇枚と多いが、二〇枚しか購入できなかったようだ。同じ周南地区の六手は筵の産地であった⁽⁵⁾から、近隣の馬登も筵の産地であったのかもしれない。

十一月二十二日「大根買友吉久七式太」、三十日「友吉久七鹿野山へ大根買に参り□」、十二月七日「友吉大根買」、二十二日「久七鹿野山大根買」と、大根を買いに行った記述がある。このうち、十一月三十日と十二月二十二日は行き先が鹿野山と具体的に記入されている。

大根を購入しているからといって、星野家で大根を栽培していないわけではない。八月十五日には大根の種を蒔き、九月と十一月に一回ずつ間引きをしている。にもかかわらず、四回にわたって買いに行くほど多量の大根の利用といえば、漬け物と考えられる。

鹿野山の名産は「お茶、大根、栗羊羹」だったと、お年寄りに教えていただいた。鹿野山の土質がクロノボと呼ばれる火山灰土であり、山の上は下に比べて気温が低く虫がつきにくかったことなど鹿野山の環境が大根の栽培に適していた。

大根栽培のピークは昭和七、八年頃から五、六年の間で、当時はみの早生という煮物に適した品種を育て、出荷期は九月から十月にかけてであった⁽⁶⁾という。

お年寄りに教えていただいた話では、お茶の畑に、お茶の木と木の間に大根を植えていたという。大根が地面をやわらかくするため、

お茶の根が土中で広がり、お茶のためにもよかったという。また、みの早生の収穫が終わった後は、沢庵大根を蒔き、冬に出荷したという。鹿野山の大根は、黄色い粉を入れなくても沢庵に漬けると黄色くなつたそうである。

日記では、十一月から十二月にかけて鹿野山に大根を買いに行っている。冬なので、みの早生のような早生の品種ではなく、沢庵用の大根を購入したのであろう。

また、安政五年にはすでに鹿野山は大根の産地だったことがわかる。

IV まとめ

地域のお年寄りといっしょに古文書を読む事で、難解と思われがちな日記だが、解読することができた。お年寄りの知識は偉大である。

それによって、安政五年当時の田畑周辺の景観が、現在とは随分違っていたことがわかった。また、この「わかった景観」は、単なる「ノスタルジックな想像」ではなく、当時の日記という記録と、民俗学的な手法から導き出した結論である。

「一五〇年前の畑を探る」は、当初予想した以上の成果も得ることができた。それは、この事業が「古文書を読む」という単独のものでなく、「おばあちゃんの畑」プロジェクトという多岐にわたる活動の一つだったことが大きい。

たとえば、「おばあちゃんの畑」プロジェクトの事業の一つに、地

域のお年寄りとともに、地域で自家採種されてきた作物を育てるとい
う活動がある。おばあちゃんたちと一緒に畑の作業をしながら、ある
いはお茶を飲みながら、わからない言葉を教えてもらい、それだけで
なく、たくさんのおばあちゃんの知恵を教えていただいた。

ここでは紹介できなかったが、君津市立久留里城址資料館が中心と
なつて行った上総唐箕や久留里鎌の調査、君津市立三島小学校、秋元
小学校の児童とおこなった「おばあちゃんの種を探そう」など、「畑」
にまつわる活動が有機的に結びつくことで思わぬ成果がうまれてきて
いる。その成果については、また改めてまとめていきたいと考えてい
る。

最後に、今回分析を行った「安政五年 日記」の中から、農事記事
のみを抜粋して掲載する。特に難解な言葉などには解説を付した。

註

- (1) 日記の分析を通した生活史の研究は数多くある。たとえば君津市久留
里大谷の名主の日記を分析した、山本光正『幕末農民生活誌』(二〇〇
〇年 同成社)、東金市台方村の名主の日記を分析した、立野晃「日記
にみる農民の一年」(『千葉県歴史 通史編 近世②』二〇〇八年
千葉県)、水本邦彦「近世の農民生活―庄屋の交遊関係から―」(『日
本村落史講座 7 生活Ⅱ 近世』一九九〇年 雄山閣出版)など多数
ある。

- (2) 『君津市史 民俗編』(一九九八年 千葉県君津市) 四一三ページ

- (3) 『君津市史 民俗編』(一九九八年 千葉県君津市) 七四ページ
(4) 『君津市史 民俗編』(一九九八年 千葉県君津市) 七二ページ
(5) 矢野淳一氏の御教授による。
(6) 『君津市史 民俗編』(一九九八年 千葉県君津市) 五六三ページ

「安政五年 日記」(『星野家文書』より) 農事部分のみ抜粋

(読み下し 木曾野正勝)

解説中の語句の説明については、(市宿)と記したも
のは市宿地区の方々に教えていただいたものである。

【二月】

十四日 今日種井戸払い(※一)定吉金次郎豊吉傳八宗八庄左衛

門佐左衛門弥市、茂兵衛目出度御神酒代六拾五文ツツ祝
い候、夜に入誠に大風に御座候

【三月】

六日 昼前里いも植申候

十二日 友吉源七苗代拵

十四日 苗代拵

十五日 苗代こい合致置申候

十六日 今日も多種蒔致候友吉源七おきよ源七内焼米搗致候

(※一)

廿二日 たばこ畑拵源七友吉、きい
廿四日 たばこ苗四千本買申候(※三)、大畑へ植付餘り天氣続
故うすごいに致沢山かけ申候(※四) 友吉源七きい
廿九日 天氣南風吹、友吉きい馬屋ごい出し、たばこ苗千八百買
大畑へ植源七友吉きい

【四月】

三日 今日かり敷初
五日 寺より茄子ほうき(※五) 木瓜苗もらい今日植付申候、
大畑へ木綿蒔
七日 朝は曇候得共五ツ時より雨少々降り出、作りごい付も止
申候
十日 種場畑菜種蒔木綿糯搗申候
十一日 新茶拵友吉源七きい家内にて火入致候、昼より菜種蒔た
ばこへだらかけ候
十三日 川崎へ作りごい付
十七日 友吉きい作りごい致、八ツ時よりたばこいだらかけ
十八日 煙草へ源七友吉きい元ごい置申候
廿日 草蒔敷今日より始友吉きい菜種もみ(※六)
廿二日 今日日柄も宜敷よし植(※七) 致し候
廿三日 今日菜種もみ

廿五日 種場畑大豆植源七友吉きい、夫よりたばこ畑麦引申候、
今日菜種干揚申候

廿六日 たばこへ元ごい源七友吉きい
廿七日 源七内友吉きいたばこへ元ごい昼前にて置切昼過より雨
餘慶降り、居下麦かり

廿八日 友吉きい水溜うない
廿九日 友吉きいたばこ畑麦かりたばこへだらかけ

【五月】

朔日 友吉きい木綿畑はだか麦蒔
二日 友吉きい源七水溜拵
三日 きい源七内水溜植付申候友吉種場畑麦蒔
四日 たばこ畑麦入
六日 昼前友吉きいたばこくるみ(※八)
七日 友吉きい源七川崎麦蒔
八日 きいたばこ草取友吉居下田拵
九日 友吉源七きい居下田拵昼より川崎大田麦束り引取切に相
成申候
十日 川崎大田うない源七友吉きい梅二郎鼻取にて溝揚場拵申
候
十一日 源七友吉川崎畔ぬりきいたばこへこやしかけ

十二日 源七友吉居下田拵きいたばこへこやしかけ

十三日 源七友吉川崎田拵助人孫八殿男吉右衛門殿男被參候

十四日 川崎作ごい出し友吉源七野村男稲葉や男きい苗取

十五日 源七友吉川崎田拵きい苗取野村より男式人馬共に稲葉屋

男大の代庄太郎居下田拵、

十六日 川崎大田植草乙女半兵衛内安次郎内久兵衛内源七内作右

衛門内助次郎内林藏内長右衛門母利左衛門内皆々助人御

座候、吉右衛門男稲葉屋男梅次郎大の代庄太郎友吉源七

松之助居下田拵

十七日 居下苗代中之田苗も取拂に相成友吉源七助人野村男松之

助

十八日 居下樋場苗代迄植仕舞草乙女長兵衛内源七内半之助内き

い男助人三四郎長之助内の友吉源七募取(※九)梅次郎

十九日 今日大麦内へ取入切申候きい三四郎日雇にて友吉は定吉

方へ助に参り候

廿日 今日野揚日待

廿一日 三四郎日雇芋うない、友吉きいはだか麦収納

廿二日 関谷畑小麦苧三四郎日雇にて源七内友吉きい、九ツ半時

より大雨降に相成、今日は早苗振舞(※一〇)にて早々

仕舞候

廿三日 野揚日待仕舞にて皆々相休申候

廿四日 三四郎ねぎ植

廿五日 友吉きい水溜田の草取

廿六日 源七友吉新田拵 きい麦扱

廿七日 関谷小麦苧源七内きい友吉、今日関谷小麦少々苧残り候

廿八日 友吉きい今朝関谷小麦苧切候、きい麦扱源七友吉新田拵

三四郎日雇にて豆作切(※一二)

廿九日 きい麦扱源七友吉新田拵今日出来に不相成候

晦日新田出来揚りきい昼前植友吉梅二郎関谷粟畑うない

【六月】

二日 関谷粟畑拵源七友吉きい梅次郎右四人にて蒔代出来に相

成申候

三日 関谷畑へ友吉源七女房共にきい定吉粟蒔昼前に仕舞、昼

より小麦収納友吉きい致候

四日 友吉きい小麦収納

五日 友吉きい小麦収納仕舞に相成

八日 きい小麦大麦収納

九日 きい友吉小麦俵に致候得ば六表程有之候

十日 友吉きい大麦収納致候

十一日 居下通り田の草友吉きい日雇おてつ源七内安二郎内樋場

田迄苧ばん草取申候

十三日 川崎田草取友吉きい源七内安二郎内おてつメ三人日雇にて今日半分取申候

十四日 川崎田の草日雇源七内お鉄安二郎内メ三人友吉麦ぬか出し候きいメ五人川崎壱ばん草仕舞に相成り候

十六日 日雇にて定吉梅次郎木綿作切友吉居下こやし出しきい川崎畑拵

十七日 友吉関谷粟作昼前切きい揚葉取(※一二)、

十八日 居下田の草友吉、きい

十九日 川崎式番草日雇源七内友吉きい

廿日 友吉きい川崎式ばん草取

廿一日 虫送(※一三) 例年の通致候

廿二日 友吉きい川崎田の草取

廿五日 関谷粟草日雇にて源七内きい友吉里いも拵

廿六日 関谷粟草日雇源七内おきくおやゑメ三人にて取申候

廿七日 関谷粟草日雇源七内おやゑ式人にて取申候、きい友吉た

ばこあみ致候

廿九日 関谷粟草取日雇源七内半之助内おせんおきく文右衛門内

メ五人にて取申候

女房友吉作切りきいたばこかい(※一四)

二日 きい田の草粟草日雇お鉄源七内半之助内おやゑ

三日 きいたばこ田の草仕舞友吉作切あわ草日雇源七内おやゑ

お鉄半之助女房半□□おきく文衛門内孫七孫□はらに

て□□致候

八日 友吉きいたばこかい

九日 たばこかいきい源七内友吉掃除致し候

十日 友吉関谷粟作切きいたばこあみ

十一日 源七友吉たばこつり(※一五) 日雇源七女房半之助女房

木綿草取昼よりたばこかいきい右同断

十二日 たばこあみ候

十三日 源七友吉たばこつり

十九日 粟式ばん草おきよ日雇にておてつ半之助女房友吉作切

廿日 関谷粟草おきよ日雇半之助女房おてつ粟草仕舞に相成候

廿一日 大豆草取日雇半之助女房おてつ友吉関谷粟作切仕舞

廿二日 友吉きいたばこ畑片付

廿三日 風坪前祝い御日待に御座候

廿四日 今日風坪にて誠に静に御座候、友吉掃除おきよ豆草

【七月】

朔日 粟草助人半右衛門内に御座候、日雇源七内おやゑ半之助

【八月】

二日 友吉きい新兵衛畑へそば蒔日雇にて半之助女房いも草取

三日 たばこ畑拵友吉きい日雇にて半之助女房

四日 友吉きい半之助女房たばこ畑うない出来に相成

五日 今日は風坪にて御日待、揚葉のし(※一六) おつねおよ

しおやゑ源七内おとりメ五人外にきい友吉は休に御座候

六日 今日も昨日のたばこのし友吉草苧候

七日 矢張今日も右同断にてたばこのし友吉は草苧候

九日 揚葉のし五人今日にてのし仕舞に相成友吉草苧候、大豆

引候

十日 今日もたばこ土葉のし日雇五人にてきい友吉豆こき

十一日 馬屋こい出し友吉きい日雇源七内およし大豆引申候

十二日 きい豆こきおよし日雇にて右同断

十三日 友吉そば作切きい日雇にて源七女房豆こきに御座候

十五日 きい源七内そばへだらかけ友吉大根蒔、昼より大豆こき、

夜に入余程降り候

十六日 友吉草苧きい長株まき

十七日 友吉豆畑端作りきいほうち致候

十八日 友吉草苧きいたばこから洗(※一七)

十九日 きい粟取友吉草苧、夜に入候て雨余程降り申候

廿日 たばこのし日雇源七女房およしおつねメ三人大豆畑うな

い友吉源七きい

廿一日 今日たばこのしおよしおつねお角おとらメ四人友吉きい

物置片付致申候

廿三日 大豆収納きい友吉は致候

廿四日 きい粟取、友吉馬登村へ葎五拾枚買に參申候、先方にて

此節葎切に相成廿枚買請帰申候

廿五日 きい田の畔へ空豆植致申候

廿六日 きい粟取物置片付源七女房昼前日雇にてたばこのし候

廿七日 きい粟取

廿八日 きい粟取致

廿九日 昼前大畑端作り

卅日 大畑源七友吉きい三人にてうない申候

【九月】

朔日 源七友吉きい畑うない

二日 三(四)郎きい馬屋こい束り友吉関谷畑へ附出し候

四日 今日水溜稲苧友吉おきよ日雇にて源七内三人にて式拾三

駄斗苧申候

六日 物置にて日雇にて源七内友吉きい三人にて稲こき

十日 友吉はねぎ種蒔新きくもまき候きい稲こき

十二日 今日水溜畔ぬり仙松源七定吉仁兵衛友吉今日出来兼申候

十三日 水溜畔ぬり仙松仁兵衛定吉源七友吉昼前出来揚り昼より

皆々休養関谷粟苧半之助女房おきよ昼より友吉馬にて粟

引取申候、畑東の方苧仕舞

十四日 樋場畑へ菜種蒔友吉源七きい昼前に片付

十六日 関谷畑もち粟苧友吉きい今日苧仕舞

十八日 友吉源七きい夫より大畑へ菜種蒔致し候

十九日 きい大根おろ拔(※一八) もろこし切申候

廿日 昼前よりもち粟取納友吉きい源七内三人にて仕舞

廿二日 友吉もち稲苧、源七内昼より日雇にて稲苧かり、

廿三日 居下もち稲苧友吉日雇にて源七女房

廿四日 関谷畑大角豆友吉源七女房式人引取申候昼前掛候得共少々

跡へ残候

廿五日 関谷畑うない友吉源七日雇にて半之助

廿八日 関谷畑うない定吉友吉源七日雇にて半之助メ四人昼前う

ない切に相成昼より半分畝立

廿九日 関谷麦蒔定吉日雇源七女房友吉久太郎

【十月】

朔日 川崎稲苧庄太郎源七女房友吉久七メ四人

二日 樋場稲苧久七友吉庄太郎、昼より居下稲束りおいよおよ

し助人にて稲こき

三日 友吉庄太郎新兵衛畑蒔違(蕎麦カ)苧おいよおよし今日も

助人にて稲こき

四日 日雇およしおいよ源七女房メ三人稲こきわらすぐり庄太

郎友吉久七わら式百廿わ出来候

五日 川崎稲束り、友吉庄太郎久七おいよ源七女房此式人は昼

過より参り苧候分束り

六日 天気、川崎稲苧庄太郎おいよ久七源七内友吉は昼前にて

昼より友吉久七中ノ田うない

七日 庄太郎居下掘上げ友吉馬作り金二郎□にて、昼より庄太

郎源七女房久七川崎稲束り切稲村(※一九)致川崎へ置

申候

八日 友吉朝より川崎稲引取久七豆こき日雇源七女房おいよお

よし稲こき

九日 川崎稲引取友吉昼前にて仕舞稲扱助人半右衛門日雇にて

源七内稲こき昼より友吉久七川崎田うない初、晩方源七

友吉稲村四ツ半積申候

十一日 友吉久七川崎田うない源七溝揚げ出来に相成申候

十三日 友吉梅次郎居下うない昼より定吉の樋場田麦うないおよ

し日雇にて稲こき

十四日 川崎麦蒔定吉庄太郎友吉久七源七およし源七女房梅次郎

大き処荒方蒔付仕事も皆々出性致し候

十五日 川崎残分麦蒔庄太郎源七女房久七友吉昼より苗代稲苧今

日かり揚げ相成

十九日 堀田麦蒔源七友吉久七夫より樋場田うない

廿日 木綿畑人參堀友吉源七久七助人半兵衛女房人參牛房(蒔

カ)畑半分掘候

廿一日 人參堀切久七友吉およし源七女房此式人は日雇にて源七

女房昼よりぬかとうし

廿二日 大畑うない友吉源七久七日雇およし

廿三日 大畑新兵衛畑樋場田麦迄蒔仕舞友吉久七源七日雇半之助

助人孫八内男おおく庄太郎昼より源七女房蒔手に参り候、

日雇にて稲こきおよし、今日は皆々出性致候て麦蒔仕舞

に相成申候

廿四日 稲こき助人おおく友吉も一同稲こき

廿六日 友吉樋場畑菜作切久七かき菜ふせ(※二〇) 昼より作

切に御座候

廿七日 天気、久七糊干致

【十一月】

朔日 源七女房およし日雇に参り稲こき仕舞友吉久七稲村積仕

舞、大北風に御座候

二日 友吉関谷麦作切久七大畑菜作切

三日 久七友吉稲収納昼前にて仕舞相成昼より菜へこやしかけ

四日 久七ぬかふるい、今晚秋揚致候源七斗り客来に候

五日 久七友吉菜へこやしかけ

六日 友吉久七梅次郎川崎麦作切

八日 友吉久七中の田麦作昼よりそば収納

九日 久七麦□ひ

十三日 久七は大根おろぬく

十七日 友吉関谷麦式番作切久七朝□□□屋参り候、夫より大畑

うね落し※麦作切

【十二月】

七日 久七居下田麦作切

十日 久七友吉川崎田麦へはいこい出候

廿八日 天気北風吹、かざりつり友吉久七定吉梅二郎、今日は至

て寒し申候

註

※一 種粉は、種まきの前に発芽を促すために水につける。そのため
の井戸が「種井戸」である。種まきに先立ち、種井戸の掃除を
した。

※二 種まきで余った種粉を焼き米にした。

※三 清和地区では昭和三〇年代までタバコの栽培をしていた。現在
の聞き取り調査では、タバコはタネから栽培し、苗を購入する
ことはなかったという。ここでは苗を購入している。苗はどこ

から購入したのか、興味深い。

- ※四 タバコを大畑へ植え付けているが、天気が続いているので、肥やしを薄めて「うすごい」にかけている。

- ※五 寺から野菜苗をもらっている。ナス、キュウリと「ほふき」の三種類。「ほふき」はホウキグサか、あるいはホウキモロコシの事であろう。ホウキグサはアカザ科の一年草で、実は「とんぶり」と呼ばれ、食用になる。ホウキモロコシはイネ科の一年草、穂は座敷蓍の材料となる。

- ※六 「菜種もみ」は、刈り取った菜種の脱穀作業。種のついた穂の部分を手でもんで種を落とす。(写真1)

- ※七 「よし植え」は稲作儀礼の一つ。田植えの前に田の畦の脇に一二株のイネの苗を植え、それぞれにヨシを五〜六本添えて植える。イネがヨシのようにまっすぐに伸びるようにと願う。昭和二〇年代頃まで行われていた。(写真2)

- ※八 「くるむ」とは、根元に土をよせること。

- ※九 「鼻取り」ハナドリと呼ぶ。牛や馬で耕耘は、牛馬の鼻輪につけた竹竿で誘導しながら前を歩くハナドリと、オオガ(大惣)と呼ばれる鋤を操って耕耘するシンドリの二名で行った。(写真3)

- ※一〇 「早苗振舞」は、清和地区でサナブリと呼ばれるもの。田植えが終わってしばらくしたら、手伝ってくれた人を招いて、ごちそうを振る舞う。

- ※一一 「作切り」とは、サウルともいわれている。畑の畝と畝の間を鋤で浅く耕すこと。(市宿)

- ※一二 「小糸町史」によれば、たばこの葉は、一本の株のうち、上の方

にしげる葉から、天葉(テンバ)、本葉(ホンバ)、中葉(チュウハ)、相中(アイチュウ)。土葉(ドハ)と呼んだ。「揚げは」は、天葉のことではないかと思われる。

- ※一三 稲につく害虫を送る行事。オオガムシ(カメムシ)などの害虫の害を防ぐことを願った。

- ※一四 「たばこかい」は「たばこ掻い」、タバコの葉を掻き取る(つみ取る)事。(市宿)

- ※一五 「たばこつり」は、つみとつたタバコの葉を乾燥させるために、縄に吊した事をさすと思われる。

- ※一六 「揚げはのし」「たばこのし」は、乾燥させたタバコの葉を熨すこと。

- ※一七 タバコの茎は洗って乾燥させ、つけ木として利用した。(市宿)

- ※一八 「おろぬく」とは、間引きのこと。ここではダイコンの間引きをおこなっている。

- ※一九 稲村とは「イナムラ」と読み、稲刈り後の稲束を積重ねたもの。(市宿) (写真4)

- ※二〇 「ふせ」とは定植する前に仮植をすること。(市宿)



写真1：菜種もみの様子。
市宿のおばあちゃんたちが2008年に行ったときのもの。
(2008.5.23撮影)



写真2：再現したよし植えの様子（鎌田さん再現）
(2008.4.25撮影)



写真3：牛による耕耘。前を歩いているのがハナドリ。
昭和30年代後半 撮影：吉原洋氏



写真4：収穫後の田んぼのイナムラ
昭和30年代後半 撮影：木曾野正勝

おわりに

この報告は筆者二名の他、以下の方々との協働により執筆いたしました。

古文書解読指導

菅根幸裕（千葉経済大学教授）

市宿地区おばあちゃんたち

萱野春子、志保澤登美、岩間初枝、金見代藤枝、成戸ゆき、竹内静

江、木曾野しずえ、奥村たけ、鹿島とし子、佐久間敏子、鈴木すゑ

子、木曾野裕子、明石和子、竹内憲夫、金見代高治、関根今朝五郎、

溝口勝美、鹿島幸雄、明石勝、加藤文子

清和の古文書を読む会

渡辺一雄、齋藤トシ子、澤田君子、鈴木誠男、鈴木啓史、遠藤好美、

林彬、渡辺晴夫

古文書補修

須藤美智子、前野和代